



は が す

— 対等の関係への願い —

津守 真

保育において、どんな人とも対等の関係に立って相手を尊重するということは、観念の上では知っていても、実際にはほとんど不可能に近いことである。それは具体的な場面に直面して、自分自身が揺さぶられ、何度も考え直して、少しずつそこに近づいてゆくよりないことである。

ひとりの子どもが私の手を引きに来た。この子は私と何かをしたいときに手を引きに来る。その子はすぐに私の手を引いて裏庭に行き、木の皮をはいで、そこにマジッ



クで文字を書き、また、私にかかせた。しばらくしてその子が保育室に行くとき、マジックをそこに置き去りにしたので、私はそれを持って立ち上がり、通りがかりに、子どもの手の届かない靴箱の上においた。私はマジックで壁に書くと消えないから、サインペンと取り替えようと思ったのである。部屋の中でその子は壁に書こうとしてマジックを探したがなかった。「マジックは庭に置いてきたんじゃない？」と私は言った（私が持ってきたのに私は子どものせいになっている）。そばにいたO先生が「取り上げたんですか？」とたずねた。私は悪いことをしたと思い、靴箱の上からマジックを取ってきて子どもに渡した。するとその子は、そこにあった絵本の絵を台紙からペリペリとはがした。そしてひとりで落ち付いて坐り、何冊も次から次へとはがした。ときどき滑り台にいつてはまた戻って来て絵本をはがした。

私はこれを見ていて、この子はこんなにはがすことに執着するのだから、字が好きなのかの子がビニールテープで文字を貼ったりはがしたりしたらよい教材になるのではないかと考えた。私はビニールテープを切って銀行の名前を床に貼った。私はいいとを考えたといたと内心得意になっていたのである（この子は銀行の名前を大人に書かせるのが好きである）。その子はそれをちよつと見て、ほんとの文字ではないテープで貼った文字など我慢ができないという風にすぐにテープをはがし、私にマジックで永統的に刻印するかのよう銀行の名前を書かせた。




「はがす」というのは、貼ったりはがしたりする遊びなのではなくて、貼った下に隠しているものを明るみに出す行為である。この子ははがすのに固執するのは、下に隠れている実体は何だという疑問を提出しているのではないか。

前年のクリスマスに、私がサンタクロースになったとき、この子はサンタクロースのお面をはがそうとしてやまなかった。この子は、お面の下の素顔を見なければ承知できないのであることがサンタクロースの私には分かった。

この子は薬が好きである。数日後、この子は職員室の棚の薬を出して並べていた。まだその子のことをよく分かっていなかった私は、薬がこぼれたら大変とはらはらしながら傍らにいた。私は薬瓶のひとつをそっとポケットに入れた。その子には分からないようにしたはずなのに、次の瞬間にその子はさっと来て私のポケットに手を入れた。こういうときの観察は実に素早い。そして私はほんの一寸でも子どもに隠し立てをすることはできないことを悟った。

貼ってあるものをはがすのは、ある時期の子どもに共通である。ガムテープをはがして包みを開く、修理のために破れたソファに貼ったテープをはがして中身を出すなど、子どもの中に何が隠されているかに興味をもつ。子どもたちの中には、何かをはがしてからでないと遊び始めない子もいる。クレヨンの紙をむいてからでないと描かない子もいる。はがすのは、ただ破壊しているのではないし、散らかしているのでは



ない。隠された素顔、ものの本質への疑問、皆が知っている真実を対等に知り、対等の関係をつくりたいという願いがこの行為の奥にある。

私が親しかったひとりの友人は、亡くなる前に、医者は隠すから嫌いだと言っていた。隠しているものに対して敏感なのは子どもも大人も同じなのである。医者は親族にだけ事実を明かして、本人にはインフォメーションを与えなかった。医者とすればそれなりの病人に対する配慮からのことであることは分かるが、親族からすれば家族の中で仲間外れをつくることになるので、私共は納得いかない思いをした。その友人が怒ったのも、自分だけ知らされないという関係からの疎外に対してであった。

かくすーインフォメーションを与えないー仲間外れにするーアイソレートする
はがすー中身を明るみに出すー開くー皆が対等に共有する

大人の中にも、はがすことに固執する人もいる。施設に住むひとりの青年は、絆創膏を貼ってもらうことに固執する。傷をしているのでもないのに、絆創膏を貼ってもらいたがり、そのときの熱心さは並ではない。そんなに熱心に貼ってもらった絆創膏もじきに自分ではがしてしまう。はがすために貼ってもらおうと言ってもいいくらいで



ある。貼ったりはがしたりの行為の反復によって、自分の疑問を投げかけているのではないかと私は思うのである。

施設に住む人たちは、家族から仲間外れにされている。家族の他の人は知っていることを知らされていない。本人たちは自分たちが家族と社会から別扱いにされていることを知っており、存在として心の中に深く傷ついている。このことが、これまでの隔離施設の根底にある悩みで、二十一世紀にはこの人たちの人生で回復せねばならないことである。

障害と診断されると、普通は別扱いをして当たり前とってしまう、そういう社会や周囲に対する疑問が、はがすという行為の根底に潜んでいたのではないか。本当にお前は対等の関係に立っているのかと、この子は問いかけていたのではないかと、あらためて考えさせられている。